

アフガン空爆はまだ続いている。

一八年間にわたり現地地で医療活動をしてきた医師だからこそ語れる、メディアでは報道されない、ほんとうのアフガニスタン――。

タリバン政権後のアフガニスタン

今年一月八日、私は再びアフガニスタンの大地を踏んだ。昨年（二〇〇一年）九月十一日の同時多発テロと、米軍などによるアフガン空爆による退避勧告以来、四カ月ぶりのアフガンだった。

パキスタンとの国境の町トルハム

は意外に平静で、変わったことといえば、ターバンを巻いたタリバン兵が、新政権の迷彩服姿の軍民に代わったことぐらいであった。「ペシャワール会」の診療所があるダラエ・ヌールでは空爆の影響はほとんどなく、何事もなかったかのように現地スタッフによって作業が進められていた。

以来、私は頻繁に現地と日本を往復しているが、心配された水も、この冬はここ二〜三年ではもつとも雪が降り、川の水も増えている。涸れ井戸が復活したところもある。それでも干ばつの被害が甚大で、とても農作業どころではないというところも多く、まだまだ安心できる状況ではないが、昨年よりは好転の兆しが見える。

昨年十月、冬の到来を目前にして、私たちは「ともかく一人も餓死



中村 哲

なかむらてつペシャワール会医療サービスPMS院長
一九四六年福岡県生まれ。九州大学医学部卒業。八四年、パキスタンのペシャワールの病院に赴任。ハンセン病を中心にしたアフガン難民の診療に携わり、八六年からはアフガン難民のための一般診療プロジェクトを立ち上げ、現在、ペシャワールのPMS病院を基地に、パキスタン側に二カ所、アフガン側に六カ所の診療所を運営する。著書に『ペシャワールにて「アフガニスタンの診療所から」』は国境を越えて「医者 井戸を掘る」『ほんとうのアフガニスタン』他。

者を出してはならない」と決意し、緊急食糧支援を開始した。

これまでにカブールやジャラバードの被災民を中心に配った小麦は合計一四〇〇ト。北部同盟がカブールを占領したのは、そのうち一〇五〇トを配り終えたころだった。本誌二〇〇一年十二月号で読者のみなさんにもお願いした「アフガンのための基金」に寄せられた真心の浄財は七億六五〇〇万円にもほり、それによって少なくとも私たちがカバーした地域では餓死者を出さずにすんだのである。ここに、本誌面を借りて厚く御礼申し上げたい。

さて、タリバン政権崩壊後のアフガニスタンだが、一言でいうと、報道が伝える印象とは逆に、いろいろな面でタリバン政権当時より状況が悪化していると考えて差しつかえない。治安が悪くなり、モラルのうえ

でも怪しげなビデオが出回り始め、ケシ（アヘン麻薬）の栽培も増えている。役人の賄賂や横暴も以前に比べてかなり目立つようになっていく。

さらに驚くのは、首都カブールの人口が昨年秋季に比べて二倍近くに膨れ上がっていることである。地方の人たちは、もう食べていけないという状況になると親戚を頼って大都市に移動する。カブールの膨張ぶりからすると、この冬、私たちの知らないところで命を落とした人も少なくないであろう。

いまそのカブールを直撃しているのが物価高である。一つには人口が急激に増えたためで、もう一つはNGO（非政府組織）や国連機関、報道関係者などが一挙に押し寄せてきたためである。たとえば、私たちが一年前に診療所として月二五〇ト

借りた家の家賃がいまでは月三〇〇〇ドルにもなり、そのために私たちは診療所を転々とかえなければならなかった。物価が上がれば庶民の生活が苦しくなるのは目に見えている。

三年間続いた干ばつのためにアフガニスタン全体で家畜の九割が死に、遊牧民が壊滅的な打撃を受けたといわれるが、農家にしても家畜がなければ耕作できない。そうすると、食べていくための手っ取り早い手段はケシの栽培ということになる。

矛盾した話だが、援助の手が入れば入るほど現金生活の比重が増してくる。地域地域で自給自足が完結している、というのがアフガン農村の特質であり、社会を根底から支えてきた。その崩れが見え始め、その傾向は援助によってさらに加速しつつあると思える。

根強い。そういう人たちが反政府的な動きをしており、再び旧タリバン系の人たちと連動することも考えられなくはない。

ニューヨークのテロで亡くなった人たちへの追悼は世界中で行われている。しかし、アフガニスタンへの空爆で亡くなった人々に対する哀悼はどこかの国で行われたという話は

事実、外国人にはなかなかわから

ないが、アフガン東部で見ると、昔のほうがよかったのではないかと気が分が少しずつ広がりはじめている。暫定行政機構が治めているのは、いまはまだ点と線であり、行政機構内部にもいろいろなトラブルがあることから、中産階級であるインテリはまだ様子見で、心から従う気にはなれないというのが一般の人々の感覚であろう。

アフガン人には彼ら なりの生き方がある

そうした気分をさらに強めているのが、いまだに続いている米軍による空爆である。

これを歓迎している人は、特権階級は別として、庶民のなかには一人としていない。「なぜわれわれの国を攻撃するのか」。大きな声でいわ

聞かない。飢えをかかえながら、空爆下を逃げ惑い、肉親を亡くした多くの人たちが、テロリスト予備軍にならないという保証はどこにもないのである。

アフガニスタンというのは、もともと統一された行政機構が全国をきっちり管理するというスタイルの国ではなかった。いわば地域地域で

ないだけで、皆そう思っている。

あまり報道されていないが、米軍が落としたクラスター型爆弾は地雷よりもたちが悪い。地上に落ちて、それが飛び散って爆発する。子供が持ち帰って家で爆発する。「ペシャワール会」の現地スタッフが確認しただけでも、ジャララバードを中心としたわずかに数十万人の地域での死者が二百数十人。負傷者は数知れない。

タリバンというのは、いつてみればアフガン農村のエッセンスのような政治勢力であった。その意味では潰そうと思っても潰しようがないわけで、形を変え、名前を変えて、再び出てくる可能性は十分にある。

パキスタン側でも、当面の危機はムシヤラフ大統領の政治力によって乗り越えたとはいえ、「外国の武器とカネで国を売った」という批判が

方自治が確立されており、そのうえに一応、統治者らしきものが君臨していたにすぎない。

いま行われている援助というのは、そういう国に日本や欧米諸国のようなモデルをつくらうとする試みだといえる。現地から見れば、壮大かつ愚かな作業である。

アフガン人にはアフガン人の生き方がある。自分たちの価値観を押しつけ、それによってアフガニスタン人を「再生」させることがアフガンの人々を幸せにする道だと信じている人がいるが、昔のものを取り除かなければ進んだ国にならないといわんばかりの援助のあり方が、はたして正しいのかどうか。そういうと、「おまえは原理主義者と通じているのか」といわれそうだが、それ自身が偏見だ。アフガニスタンの一般の人々も同じ気持ちだと思ふ。

ベシャワール会の活動地域



その端的な例が「教育」である。アフガニスタンの伝統的な文学は口承文学であり、有名な詩人で文字の書けない人も実際にいる。アフガニスタンは識字率が低いというが、文字が読める、読めないということがそのまま文化的進度の尺度になるのだろうか。

英語をしゃべれる人が優れているわけではないし、読み書きができる民族がえらいのかというと、そんなことはないはずである。

三十数年前のザヒル・シャー元国王時代、西洋的な国民教育を普及しようとして、軍隊を出動させて無理やり学校に行かせ、そのため各地で反乱が起きたことがあった。その状態のまま内乱に突入し、現在に至っているわけだが、昔のままが悪いのかというと、必ずしもそうとはいえないのではないかと気がする。

れているのは可哀相だ、解放してあげなくては、という類いのよけいなおせっかいなのである。

テレビで盛んに報道された女性のための「隠れ学校」も、禁じられていたのなら、カブールだけで数十カ所もあつたその存在が、ばれないはずがない。女性のための教育は実際にはこれまでもユニセフ（国連児童基金）を中心に行われていたのである。これはタリバンにも表の顔と裏

メディア報道の裏に 隠された真実の姿

教育というのは、何のためにあるのか。大きな柱は二つあると思う。生活していくための「技術の習得」と、人間としての徳というか、修養を積む「人間教育」である。

生活していくための教育であれば、圧倒的に多い農民、遊牧民の子弟にとつては、家の手伝いをすることがそのまま技術教育になる。人間教育の面からいえば、金曜日ごとにモスク（イスラム教の礼拝所）に行き、一日五回のお祈りをして、人間として、〃していいこと〃と〃してはいけないこと〃の分別を身につけることこそ立派な人間教育となりうる。そういうことまで変える必要はたしてあるのか、というのが私の素朴な疑問である。

の顔があり、本音の部分があまりにも知られていなかったという問題にほかならない。

タリバン政権が禁じていた風揚げができるようになったといって、子供が風揚げをしている風景を放映していたテレビにいたっては話にもならない。風揚げは以前からアフガン中で行われていた。

こうしてみると、メディアというものがかいかに一方的、一面的で、わかりやすい筋書きの作り話をとたれ流すものであるかよくわかる。

援助を決める国際会議もあまりにもきれいなことが多すぎる。今年一月、東京で開催された「アフガン復興会議」にしても、結局はおカネの勘定で終わってしまった。それどころか、援助項目を決めたのは有害でさえあつた。いったん援助項目が決められてしまうと、それに拘束され

私たちが子供のころは、家の手伝いをすればほめられたものだった。それを「小児労働」と称して、子供が働くことを否定するような思想が健全なものとは思えない。地縁・血縁社会であるアフガニスタンでは、家族や親戚が困っていれば、子供も大人も皆で助け合うのが自然な姿である。

女性の人權ということ、女性がブルカ（目の部分だけをあけ、全身をおおう外衣）を脱ぐことを近代化の象徴のようにいうのものはなほだしいはずだ。

そもそもブルカというのは、パキスタンのペシャワールでもそうだが、ほとんどの農村における一種の女性の外出着である。ブルカを〃着せられて〃女性の人權が侵害されているというのは、日本女性の着物の帯を見て、あんなに体が締めつけら

て、現地の人たちが必要としていることでも項目に入っていないということ、動きづらくなるからである。

さらに、あの会議が、「これで何もかも解決した。あとは復興だ」というような、なんとなくアフガニスタンの問題にピリオドが打たれたような感じを世界に与えたことは、私は大きなマイナスだったと思う。

NGOについていうと、名前は連ねていても、実際にはそれほど活動していない団体があまにも多い。

私たちは一時、五カ所あるカブールの診療所の閉鎖を考えたことがあつた。NGOが入るのが決まって、ほとんどが目立つカブールに集中する。カブールが〃NGO銀座〃になるのなら私たちがいる必要はない。その力を本来の活動の場である農村に向けよう、と考えたのである。

ところが、入ってきたNGOには、



掘った井戸の中に自ら下りていく中村医師

宣伝のわりにはそれに見合った医療活動が見られない。そのために私たちは住民の強い要望で、いまでも市内三カ所で活動を続けざるをえないでいる。

NGOは、日本では「正義の味方」のように思われているが、アフガニスタンではやや軽蔑けいべつの対象になっている。

一つには、NGO自体が一つの企業体になっており、「彼らはあれで食っているのだ」と見られているからである。もう一つは、援助が片寄り、その恩恵が一部にしか及ばないということが、過去、数えきれないくらいあったからである。

もう一つ、日本人が知らなければならぬのは米国への軍事協力である。アフガニスタンの人々が日本に対して非常に友好的であることは前回述べた。幸いなことに、今回の自

われわれは先進国なのだから、進んだものを与え、教えて、役に立ちたい、というのは思えばはなははしいと思っている。

したがって、私たち「ペシャワール会」の活動の基本方針が、彼らのやり方を手助けするというものであることは今後とも変わらない。

具体的には、第一に、その地域の人々が生活してきた生活基盤を復活させることである。いま井戸掘りの作業地は八〇〇カ所以上になり、そのうち六百数十カ所で水が使えるようになってきている。それをさらに拡大

衛隊の出勤についてはいまのところ現地では大きく報じられておらず、それで助かっている面があるが、もし報じられれば、日本に対する信用はガタ落ちになるだろう。

心配は、カブールの治安維持のために出動している多国籍軍の有力メンバーがトルコ軍であることから、日本政府がトルコ政府を通じて多国籍軍を支援するという話が現実化しつつあることである。これは由々しい問題をはらんでいる。そうなるのと、テロ対策どころか、日本はテロの危険を身近に引き寄せることになるだろう。

本質的には空爆と 変わらぬ復興支援

アフガニスタンの立国の基礎は農業であり、アーモンド、クルミ、柑かん橘きつ類の巨大な輸出国になっている。

していけば、住民たちは村を離れずに住む。

第二に、医療活動については、いま私たちはペシャワールにある七〇床の基地病院を中心に、アフガニスタンに六カ所、パキスタンに二カ所診療所をもっているが、その診療所を建て替えるなどして質を向上させ、予防的な医療を取り入れながら、さらに現地に定着していきたいと思っている。また、いますぐにというわけにはいかないが、情勢が落ち着いてくれば診療所を増やしたいとも考えている。

オレンジもオリーブもできるし、スイカもザクロもブドウもおいしい。アフガニスタンの人々のためには、基本的には数千年の歴史のなかでそれなりにでき上がった伝統的な農村社会を基盤に、多少のゴタゴタはあっても、ゆるやかなまとまりをつくっていくというのがいちばん幸せな道であろう。

アフガニスタンの将来はアフガン人自身が決めるべきであり、自分たちの選択によって変わっていくのならばともかく、そういう伝統的なたちを無理強じいして変えるのは余計なお世話である。

「選挙制度がない」というが、われわれが考えているような国家がアフガニスタンに必要な国家である。そういうと反論があるかもしれないが、医者としてアフガニスタンに入つて一八年、正直、私はそう思う。

最後に、この半年間を振り返って危惧きぐするのは、結局はアフガニスタンを空爆したのと同じ論理の援助がいま行われているのではないかという点である。

あそこには危険な宗教グループがある。それを潰してしまえという筋書きが作られ、その通りにことが運ばれつつあるように思われてならない。その意味では、いま行われている復興支援も本質的には空爆とそう変わらない。この不寛容と尊大さは、非西欧世界にとって危険な兆候である。